







## 世界史

I 次の文章は、ルターがその前年に起こった大規模な反乱について 1525 年に書いた著作の一部である。この文章を読んで、問いに答えなさい。(問 1, 問 2 をあわせて 400 字以内)

農民たちが創世記 1 章, 2 章を引きあいに出して, いっさいの事物は, 自由にそして[すべての人々の]共有物として創造せられたものであると言ひ, また私たちはみなひとしく洗礼をうけたのだと詐称してみても, そんなことは農民にはなんの役にもたちはしない。なぜならモーセは, 新約聖書においては発言権をもたないからである。そこには私たちの主キリストが立ちたもうて, 私たちも, 私たちのからだも財産も挙げてことごとく, 皇帝とこの世の法律に従わせておられるからである。彼は「皇帝のものは皇帝にかえしなさい」と言われた。パウロもローマ 13 章において, 洗礼をうけたすべてのキリスト者に, 「だれでも上にたつ權威に従うべきである」と言っている。(中略)

それゆえに, 愛する諸侯よ, ここで解放し, ここで救い, ここで助けなさい。領民にあわれみを垂れなさい。なしうるものはだれでも刺し殺し, 打ち殺し, 絞め殺しなさい。そのために死ぬならば, あなたにとって幸いである。

(「農民の殺人・強盗団に抗して」『ルター著作集』第 1 集第 6 巻より引用。但し, 一部改変)

問 1 下線部は「農民たち」によって提出された要求を比喩的に説明したものである。具体的にはどのような要求であったか述べなさい。

問 2 「聖書のみ」というルターの主張は, 各方面に大きな影響を及ぼした。「農民たち」が考える「聖書のみ」と, ここでルターが表明している意見の相違はどのようなものであり, どのような理由で生じたと考えられるか, 述べなさい。

Ⅲ 20 世紀中葉において資本主義世界の覇権がイギリスからアメリカ合衆国に移行した過程を，19 世紀後半以降の世界史の展開をふまえ，第 2 次世界大戦・冷戦・脱植民地化との関係に必ず言及して論じなさい。(400 字以内)

Ⅲ 次の文章 A, B を読んで、問いに答えなさい。(問 1, 問 2 をあわせて 400 字以内)

A (1860 年代において、当時の朝鮮の政権と思想的方向性を同じくする)奇正鎮・李恒老は(中略)攘夷論を開陳した。たとえば奇正鎮は、「洋胡」(西洋諸国)と条約を結べば、儒教の道徳や礼制はたちまちに滅び、「人類」(朝鮮の人間)は禽獣となると危機感を表明した。これは、「邪説」を排撃して「正学」(朱子学)を崇ぶという「衛正斥邪」の内容をさらに拡大して、西洋諸国を夷狄(「洋夷」)・禽獣であるとして全面的に排斥し、儒教道徳・礼制、それに支えられた支配体制を維持擁護しようとする主張であった。

西洋諸国を夷狄・禽獣と視るのは、① 意識によるものであった。(中略)西洋諸国は儒教を否定する「邪教」の国であるから、夷狄あるいはそれ以下の存在である禽獣ということになる。

B (1876 年に)李恒老の門人の崔益鉉は開国反対上流を呈した。崔益鉉は条約調印に反対する理由として五点を挙げたが、そのなかには次のような点があった。

「日本との交易を通じて、『邪学』が広まり、人類は禽獣に化してしまう。」「内地往来・居住を拒めないから、日本人による財貨・婦女の略奪、殺人、放火が横行して、人理は地を払い、『生靈(じんみん)』の生活は脅かされる。」「人と『禽獣』の日本人とが和約して、何の憂いもないということはありません。」

崔益鉉の描く日本人像は、奇正鎮の描いた「洋夷」像と何ら異なるところがない。実際に崔益鉉は上疏において、倭(日本)と洋は一心同体であるとする「倭洋一体論」を展開した。

(糟谷憲一「朝鮮ナショナリズムの展開」『岩波講座世界歴史 20 アジアの近代』より引用。但し、一部改変)

問 1  は、17 世紀の国際関係の変化を受けて高揚した、自国に対する朝鮮の支配層の意識を示す言葉である。これを記しなさい。

問 2  意識がいかなるものであり、どのような背景があったのか、また、それが 1860～70 年代にどのような役割を果たしたのかについて、それぞれ国際関係の変化と関連付けて述べなさい。